

統合カリキュラム (Integrated Curriculum) と Service-Learning からみる CLIL 論  
 - 小学校英語の事例から -

倉本 哲男

1. はじめに - 統合カリキュラム論と Service-Learning の視点から -

「日本CLIL教育学会」によれば、「CLILは、Content and Language Integrated Learningの略称」であり、「教科科目やテーマの内容 (content) の学習と外国語 (language) の学習を組み合わせた学習(指導)の総称」と定義している。また、CLILの主な特徴は「学習内容 (content) の理解に重きを置き、学習者の思考や学習スキル (cognition) に焦点を当て、学習者のコミュニケーション能力 (communication) の育成や、学習者の文化 (culture) あるいは相互文化 (inter-culture) の意識を高める点にある」と整理している。(https://www.j-clil.com/clil)

そのCLIL論を概観する際、それに関する議論の一つに、教科の基礎基本との統合性の課題があり、その体験的活動と教科内容・スキルを統合するカリキュラム開発論 (Integrated Curriculum) は重要な視点となり得る<sup>注(1)</sup>。更に、上述のCLIL論に示唆を得る意味で、USAの統合カリキュラム論の潮流に位置付き、それを実践化したサービス・ラーニング (Service-Learning 以下、SL) を論じることも、学的に興味深いと言えるであろう<sup>注(2)</sup>。

まず、米国における統合カリキュラムの理論と実践は、特に80年代に注目を浴びるようになり、James A. Beaneは教科間の関連性を図りカリキュラムを統合していくことを提唱している。教科カリキュラムは系統性を過剰に重視する傾向があるので、カリキュラムのなかに個人と社会の統合点を保障する中心テーマを形成する重要性を説いている<sup>注(3)</sup>。

USAのAssociation for Supervision and Curriculum Development (以下、ASCD) ではH. H. Jacobsの研究が著名な一つであり、「教科の特質を残すカリキュラム (parallel disciplines)」「教科間をつなぐカリキュラム (multiple disciplines)」「完全なる融合形態カリキュラム (interdisciplinary/ integration/ complete program)」の統合カリキュラム論の三形態を整理している<sup>注(4)</sup>。

同様に、ASCDのSusan M. Drakeも、以上の統合カリキュラム研究動向に位置付き、後述する三形態の概念的構造を示している。Drakeは、教科の統合を三段階に示し、特に最終段階の統合カリキュラムでは、中心テーマをコアに据えながら、漸次的に各教科が学習活動にブレンドされるカリキュラム論を構想した。そのカリキュラム開発における目標論を市民教育論 (citizenship education) において、如何に学習者が民主的で自立的の市民として成長することができるのかを重要課題の一つに掲げている<sup>注(5)</sup>。

この統合カリキュラム理論の流れを実践化したSLは(詳細は後述)、サービスの体験活動をコアに据え教科内容の基礎基本との統合を図りながら、教科内容・スキルの習得と

その学習過程において培う問題解決能力や意思決定等の学習能力を伸長するものである。以上のことから Drake の統合カリキュラムの理論的枠組みは、SL カリキュラム開発論にとって、及び、本著の主題である CLIL 論への示唆を得る上でも、有効性を持つと考察できよう。

よって本章では、CLIL 論への示唆を得る観点から、第一に、特に Drake の統合カリキュラム (Integrated Curriculum) 論の三形態について論じ、第二に、その統合カリキュラム論を反映する著名なサービス・ラーニング (Service-Learning) について整理する。

以上の事から第三に、Service-Learning からみる小学校英語・CLIL 授業の試みについて事例を紹介する。これらの視点から本章は、CLIL 論の深化・発展にとってささやかな学的貢献を意図するものと位置付けたい。

## 2. Drake の統合カリキュラム (Integrated Curriculum) 論の三形態 (CLIL 論への示唆 1)

前述の Drake は、統合カリキュラムの理論を体系化した著名な研究者の一人である。Drake によれば、統合カリキュラムの三形態を「教科横断的統合カリキュラム (Multidisciplinary Integrated Curriculum, 以下 MDIC と略<sup>注(6)</sup>」「学際的統合カリキュラム (Interdisciplinary Integrated Curriculum, 以下 IDIC と略<sup>注(7)</sup>」「転移学際的統合カリキュラム (Transdisciplinary Integrated Curriculum, 以下 TDIC と略<sup>注(8)</sup>)」に分類している。

つまり、教科学習も、真の意味で学習者の興味関心を活かし学習内容を展開していくのであれば、必然的に教科枠内の学習では収まりがつかず、その枠を乗り越える統合的学習形態に発展していくことを Drake は指摘しており、そこでは学習内容相互が統合し、必然的に、その中心テーマに融合していくプロセスをとるとしている。

上述の統合カリキュラムの三形態の概念的構造にはそれぞれ違いがあり、MDIC が初期的な統合性を示し、IDIC と TDIC に若干違いがあるものの、学習者の興味関心から出発し中心テーマと教科内容が自然に融合する統合的な構造性を持つとしている。以下に、Drake が類型化した3つの統合カリキュラムの概念的構造論の整理を試みる。

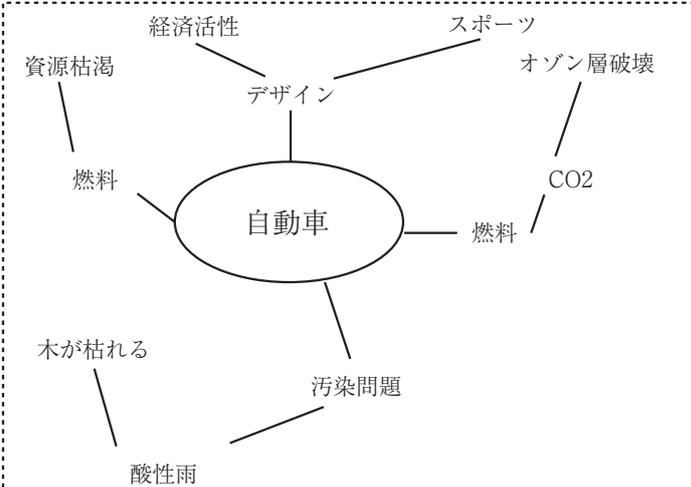
### 1) 教科横断的統合カリキュラム (MDIC) の概念的構造

図 2-1 の MDIC は、ある教科内容と他教科内容との関連性に力点をおく統合カリキュラム開発方法論である<sup>注(9)</sup>。一般に、各教科教育では教師のイニシアティブによってカリキュラムが構成され、その授業展開においても主として教師が指導性を発揮することで成立していく。

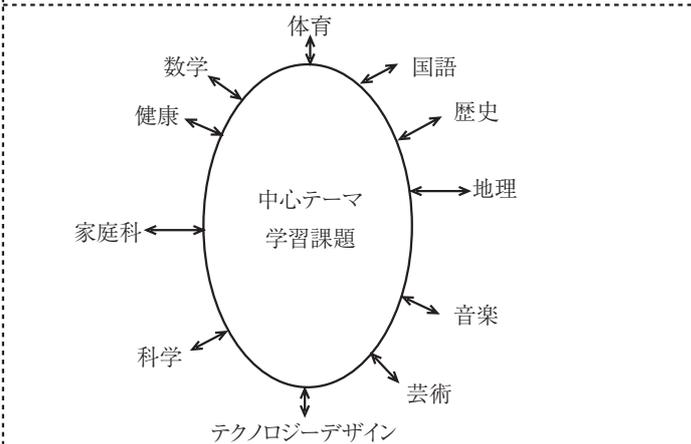
MDIC のようなウエビングに対する批判点は、学習者の思考回路が広がりすぎ、一つ一つの思考過程において表面的理解・浅いレベルの学習活動に留まってしまうことが指摘される。教科教育には各教科独自のストラテジーがあり、ウエビングによるコンセプト拡大の際にも、各教科領域のフレームワーク内に留まり学習活動の発展性がみられない等の限界点がある。MDIC は学習者の興味関心と必ずしも合致するものではなく、カリ

キュラム統合の命題から外れて教科的範疇から学習内容を制限する傾向もある。

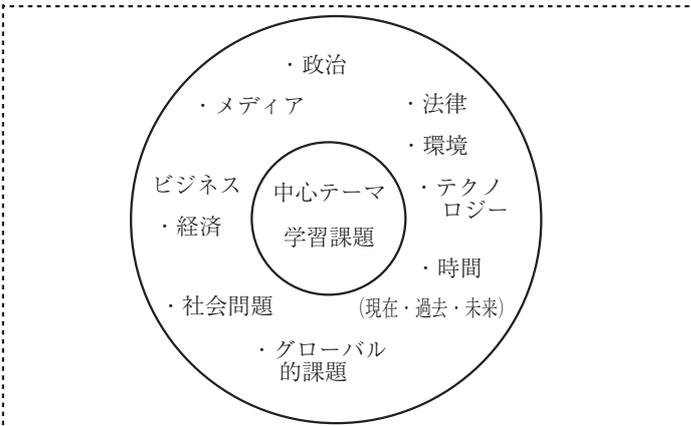
2) 学際的統合カリキュラム (IDIC) の概念的構造



(図1. MDIC 概念的構造<sup>注6)</sup>)



(図2. IDIC 概念的構造<sup>注7)</sup>)



(図3. TDIC 概念的構造<sup>注8)</sup>)

### ① IDIC の概念的構造原理

図2のIDICは、教科内容を越えて共通項目に焦点化する方式による統合カリキュラム開発論であり、中心テーマ・学習課題に対する教科間の関連度がMDICよりも更に高まるアプローチに依る<sup>注10)</sup>。現代的教育課題を見据え、批判的思考力・調査能力等を有効に活かした学習スキルの構造化によって統合カリキュラムを構成していく。またIDICは、教科内容の習得とその学習過程において培う問題解決能力や意思決定等の学習能力を、教科内容の基礎基本との関連を図りながら如何に伸長・活用するかが重要である。

Drake自身は、MDICのウェビング方法以上にカリキュラムの統合性を深化させるものとしてIDICを積極的に評価している。このアプローチはDrakeが評価するJacobsによっても論じられ、IDICのウイール（操縦）は、カリキュラム開発者の意図を反映させながら各教科内容・スキルを網羅しカリキュラムに統合していくとする。そのJacobsによれば、幾つかの教科教育内容が各々の学習課題によって分類され、その小グループが周辺課題を統合するかたちで部分から全体的統合のプロセスを経ている。IDICの構造化からのアプローチでは、各教科の基礎基本から獲得できる批判的思考力や問題解決能力等の学習スキル・学習能力を、徐々に中心テーマの周辺に統合していくところが特徴的であり、部分的な外部から中心的内部へと構造化されていくプロセスをとる。

例えば、森林破壊などの環境教育などが典型的である。生徒はその現状を調査し、可能な解決策を講じる過程で調査能力・批判的思考力・意思決定・問題解決能力等の学習能力・学習スキルの育成を図ることができるとする。

## 3) 転移学際的統合カリキュラム (TDIC) の概念的構造

### ① TDIC の概念的構造原理

図3のTDICにおける教科相互間の統合性は学習者の興味関心を中心テーマに据えて自然なかたちで融合している<sup>注11)</sup>。そのTDICにおける融合とは、学習テーマ・学習スキル・学習ストラテジー等が、学習者の帰属する現実世界（生活背景）の意味・文脈と学習者の興味関心・主体的学習態度等と関連し、学習者がそれを自覚化・明確化することを基本的アプローチに据えている。これは学習中心テーマのもとに教科の目標・内容・方法論と学習者の文脈とをブレンドした統合カリキュラムの開発であり、学習統合のプロセスに教科相互の結合点を垣間見ることができる。TDICの概念的構造は学習者を中心に据えた完成度の高いコアカリキュラムであると考察できよう。

TDICにおけるブレインストーミングでは、教科の範疇を完全に超えることが求められる。ここでは学習中心テーマに関連するコンセプト自体が個人的コンセプトの獲得レベルに終始するのではなく、社会認識的コンセプト（政治的・文化的等に関わるコンセプト）へと拡大し、究極的にそれが学習者へと内在化していくことをストラテジーとしている。

現実世界の 이슈に焦点化しながら学習中心テーマに関わる経済・法律・メディア・環境・テクノロジー・政治的問題・歴史（過去・現在・未来）等に関わる学際的事項をカリキュラムのなかに統合していくのであり、構造的に視野の広がりや深まりを持つ。

教科教育の目標方法論にとらわれることなく、あくまでも学習中心テーマと学習者である自分自身の関連性で把握し、自己と学習対象を統合していくことで学習を進展することが TDIC のカリキュラム開発の基本的構造的性を示している。

つまり、Drake は単なる数学や科学等の教科内容・スキルの伝達継承という立場だけに関心を持つのではなく、学習者である生徒が現実世界に直面し生き抜く力を培っていくことを最重要視しており、ホリスティック教育論を踏まえながら生徒が人間存在そのものを理解する人間性の教育を最重要課題に掲げている。また、Drake はジェネラルエデュケーション論の教育的思想を総括するかたちで TDIC を提唱し、全体性と部分性の双方から学習者を中心に据えて統合していく構造的性を持つ統合カリキュラム理論であると整理し、これを人間の知識が深化拡張していく全体性の論理・統合の理論として捉えている<sup>注12)</sup>。

## ② TDIC の学習成果とその評価

TDIC は、市民教育論 (Citizenship Education) の立場から、学習者の将来的な「生きる力」・生きて働く能力の獲得を本質的な教育目標に据えたコアカリキュラムの形態をとる。変化の激しい社会において、学習者である生徒の将来的なライフスタイルを具体的に考察すれば、生涯教育の視点も欠かすことができない。激変する社会的状況に直面するとき、ライフスキルこそが求められるのであり、TDIC のスキルには高次元の論理的思考力や、複雑な社会的文脈における社会的認識やその認識獲得方法等を学習することを挙げ、それを TDIC の学習成果としている。そこで Drake は、生涯学習の観点からみるライフスキル (TDIC の学習成果) を以下のように整理している。

- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| ・リソースや情報などの管理運営   | ・数学や科学の基本的能力      |
| ・キャリアの計画や見通し      | ・コンピューターリタラシー     |
| ・問題解決能力やコミュニケーション | ・社会へ貢献しようとする態度    |
| ・柔軟性や受容性のある思考力と態度 | ・創造性や発明性等のチャレンジ能力 |
| ・多様な仕事に対する積極的姿勢   |                   |

これらのスキルは生涯学習的視点にたったパフォーマンスであり、我国で論じられるところの「資質・能力論」に類似するものと考えられる。

以上、ASCD の Drake の統合カリキュラムの3類型を整理しながら論じてきた。特に TDIC は学習中心テーマに各教科のアカデミック要素を融合し、実生活の文脈の中で民主社会の形成者として自立した市民を育成することにその目標があると総括できよう。

よって、この統合カリキュラム論が、市民教育論 (citizenship education) と合致するかたちで SL カリキュラム開発論のバックボーンとなっていく。次に、その SL 論について

て整理を進める。

### 3. サービス・ラーニング（Service-Learning）論（CLIL 論への示唆 2）

USA における 1980 年代後半からの教育動向の一つに、SL の普及が挙げられ、その深化拡充を意図して 1990 年には National and Community Service Act of 1990 が制定された。

それによれば SL とは、コミュニティーにおける市民性（Citizenship）を向上させることを教育目標に据え、アカデミック教科学習とコミュニティーにおける貢献的活動を統合（Integrate）することによって、新たなカリキュラム・学習論を意味している。

例えば、SL を実践化する（Alliance for Service-Learning in Education Reform）はその定義を、以下のように整理している。

「SL は、生徒が主体的に参加するサービス経験を統合化し、その学習経験を発展させていく教育方法・教育課程である。その経験は地域社会の必要性に適合するものであり、学校と地域社会を関連させ、生徒たちの体験を学的カリキュラムのなかに統合化していくものでもある。SL は、生徒たちが学校での学習経験を活用しながら地域社会に貢献するサービス体験を通して、主体的な学習経験をすることであり、地域社会の一員としての自覚と責任も学ぶものである。<sup>注13)</sup>」

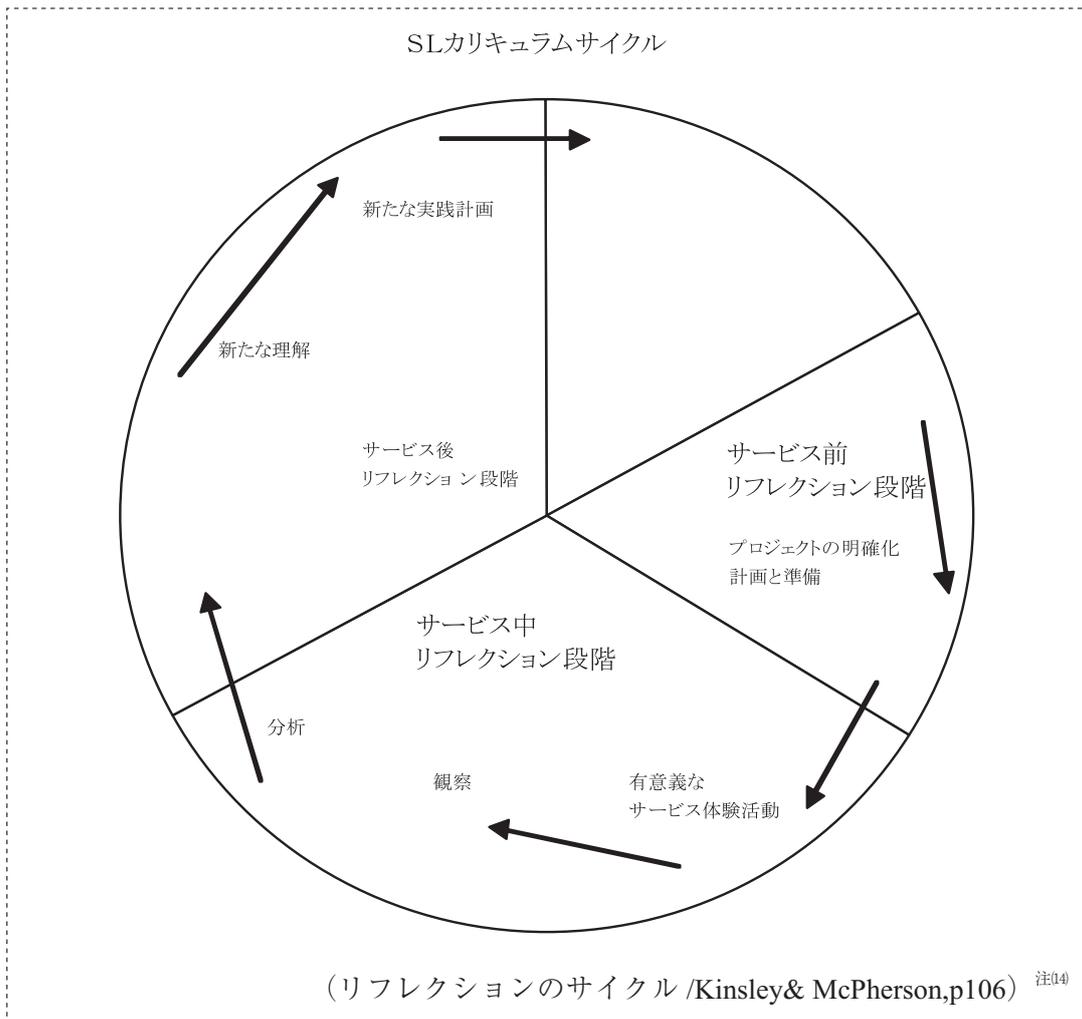
つまり、端的に SL とは、社会貢献力（市民性）とセルフエスティームの向上を中心目標とする統合カリキュラム論、及び授業論であるが、アメリカの伝統的なボランティア精神を実践化する教育活動とも換言できる。

ここで、我が国における SL に関する指導上の留意点は、「社会に開かれた教育課程」の実現を通じて子どもたちに必要な資質・能力を育成するという新しい学習指導要領の理念との整合性にある。この理念は、2015 年 12 月の中教審「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」（答申）の中にも垣間見ることができる。本答申は、地域社会・コミュニティースクールについて論じられているが、これをカリキュラムマネジメントの視点で論じることは、今後の教育改革・学校改善の戦略上、極めて有益な視点と成り得る。

本答申では、学校が抱える課題の解決を図り、子供たちの教育活動等を一層充実していく視点から、地域住民等と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子供たちを育む「地域とともにある学校」に転換していく仕組みとして、地域社会・コミュニティースクールが提言されている。同時に、地域社会・コミュニティースクールと地域が相互に補完し、相乗効果を発揮していく在り方も重要な視点となっており、その典型的なカリキュラム・授業論が、統合カリキュラムを前提とする SL であると概括できよう。

更に、SL の実践場面では、その授業方法論にリフレクションを必ず位置付けている。サービス後の学習過程であるリフレクションこそが最重要であり、以下の具体的視点についてリフレクションを働かせ、サービス活動の「自己内在化」（internalization）と「学習の継続性」（sustainable learning）を保証する活動を重視する。

- 社会貢献活動を通して地域社会の変革にどのように関わったのか。
  - 社会貢献活動から新しく学んだ知識をどのような場面で再活用できるのか。
  - 地域社会に主体的に関わったことは自分にとってどのような意味があったのか。
  - どんな人間関係・アカデミックスキルを学び、どのように Self-Esteem を高めたのか。
- 以上の理論から SL とは、その構成因子は「教科要件・内容」「コミュニティのニーズ」「生徒の主体性・興味関心」とに大別され、「リフレクション」によって効果性が求められる学習・カリキュラム論であると総括できよう。



また、その思想的ルーツは、本章では論じることができないものの、Dewey らの Pragmatism まで遡る経験主義的な問題解決学習論と教科・系統性との統合カリキュラム論であることも付け加えておく。

#### 4. 終わりに - Service-Learning からみる小学校英語・CLIL 授業の試み -

「小学校 CLIL 学会」によれば、「CLIL (内容言語統合型学習) は、内容 (社会や理科などの教科ないしは時事問題や異文化理解などのトピック) と言語 (実質的には英語) の両

方を学ぶ教育方法」であり、「Content（科目やトピック）、Communication（単語・文法・発音などの言語知識や読む、書く、聞く、話すといった言語スキル）、Cognition（様々な思考力）、Community ないし Culture（共同学習、異文化理解、地球市民意識）」の4Cを重視している。(http://primary.cliljapan.org/what-is-clil/) <sup>注15)</sup>

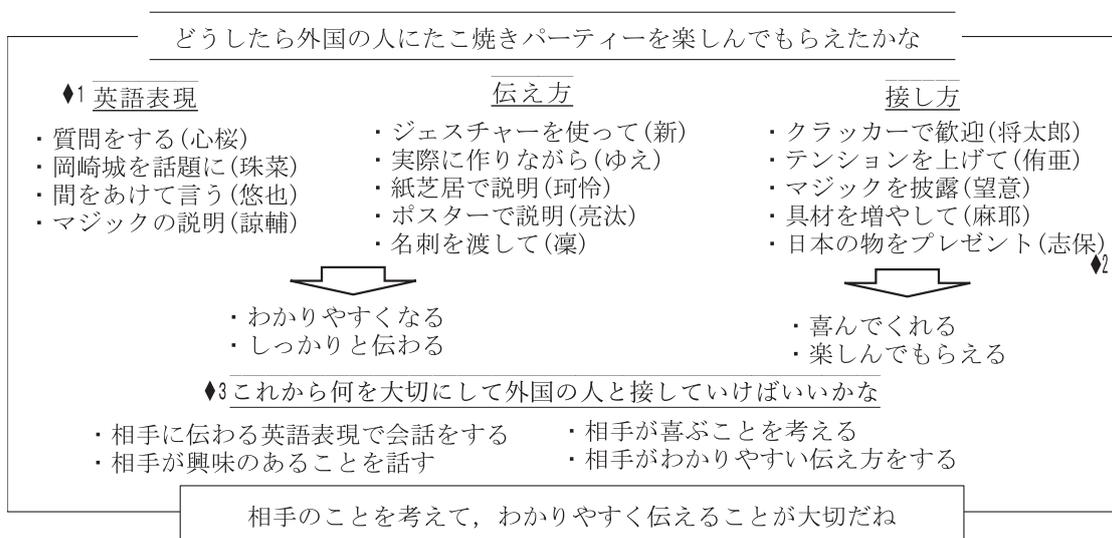
以上に鑑み、2019年、小学校5年生の「Let's enjoy Takoyaki Party: 一緒に作って食べてあふれる笑顔」の事例（愛知教育大学附属岡崎小学校・廣川幸平/研究主任）は、「教科内容を題材にさまざまな言語活動を行うことで、英語の4技能を高めることができ、子どもたちの発信能力を高め、英語教育の質的向上をもたらす」CLIL実践の典型例であった。

本実践は、たこ焼きパーティーで外国の人と交流することを通して、追究してきた英語表現や伝え方、接し方のなかで、外国の人に楽しんでもらうために有効だったことは何かを伝え合うことで、相手のことを意識して英語表現や伝え方を考え、相手を気遣った接し方を学び、今後もコミュニケーションを豊かに外国の人と交流していこうとする姿を引き出すことを教育目標に設定している。このとは必然的に、Content, Communication, Cognition, Community/Cultureの4CのCLIL実践に該当する。

本時では、第一に、どうしたら外国の人にたこ焼きパーティー(Content)を楽しんでもらえたのかについて伝え合い、有効であった英語表現や伝え方、接し方の視点に分類して議論を重ねた。第二に、相手がわかりやすい英語表現や伝え方、相手が喜べるような接し方をすること(Communication)で、楽しんでもらえるようになるということ(Cognition)を「これから何を大切に外国の人と接していけばいいか」(Community/Culture)を追及している。

その上で、実践者・廣川氏は「相手に伝わるような英語表現、わかりやすい伝え方、相手が楽しめるように気遣いをしていくことなどが大切であると考え、今後もコミュニケーションを豊かに外国の人と交流していこうとする姿を引き出したい。」と、指導観を明確化している。その展開案は以下の通りであった。

## 展 開



ここで統合カリキュラムと Service-Learning からみる CLIL 論の視点から、以下の実践者の指導観点が特筆に値する。

◆1 さらに英語表現を増やす視点が共有できるように (Communication), 英語に限定せず、たこ焼きを作ったり食べたりする (Content) ときの日本語での会話、及び、身振り手振りも増やしていけばよいと考えている児童の発想を重視し、その後、そのために、日本の文化や歴史についてつたえていけばよいと考えている児童の社会的・歴史的認識を活用している。 (社会科・国語科との統合カリキュラム論)

◆2・3 相手のことを考えた英語表現や行動をしていくことが大切であることを全体で共有できるように (Cognition), 相手に親切にすればよいと考えている児童や、相手に合わせればよいと考えている児童に語らせ、その視点で考えたことは何か (Community/Culture) を問い続ける。授業の終末では、外国の人に楽しんでもらうための具体的な方法を考え、学校社会から国際社会へと発信する姿を引き出す。 (Service-Learning の学習論)

以上、CLIL の考え方が急速に広まりつつある現在、本章では、「国語・社会・道徳などの教科学習と英語の語学学習を統合し (統合カリキュラム論), これに加えて、コミュニティの中で市民性を育み、その社会的・言語的活動を通してセルフエスティームを高める学習論 (Service-Learning) 等も CLIL 論の一端である」と提唱したい。

(付記)

本章の統合カリキュラム論、及び、サービス・ラーニング論に関する論考は、以下の著書の該当部分を再整理したものである。

倉本哲男 『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究 - サービス・ラーニング (Service-Learning) の視点から -』 ふうろう出版 2008・2018 年。

また、小学校英語の実践は、愛知教育大学附属岡崎小学校・廣川幸平 / 研究主任の事例である。ここに感謝の意を表したい。

注

- 1) 日本教育方法学会編 『総合的学習と教科の基礎基本』 図書文化, 2000 年。
- 2) Janet Eyler and Dwight E. Giles, Jr, "Where's the Learning in Service-Learning," Jossey-Bass Publishers, 1999, pp.57-81.
- 3) James A. Beane, "A Middle School Curriculum from Rhetoric to Reality," National Middle School Association, 1990.
- 4) H. H. Jacobs, "Interdisciplinary Curriculum: Design and Implementation," Association for Supervision and Curriculum Development, 1989.
- 5) Susan M. Drake, "Planning Integrated Curriculum the Call to Adventure," Association for Supervision and Curriculum Development, 1993, pp.33-51.
- 6) Susan M. Drake, pp.33-37.

- 7) Ibid., pp.38-40.
- 8) Ibid., pp.40-51.
- 9) Ibid., p.36.
- 10) Ibid., p.39.
- 11) Ibid., p.41.
- 12) Susan M. Drake, "Developing an Integrated Curriculum Using the Story Model," Toronto:OISE Press, 1992.
- 13) Wade, R. C., "Community Service-Learning, A Guide to Include Service in the Public School Curriculum," State University of New York Press, 1997. p19.
- 14) Kinsley, W., & McPherson, K., "Enriching the Curriculum through Service Learning," Alexandria, VA, ASCD, 1995. p106.
- 15) (<http://primary.cliljapan.org/what-is-clil/>)